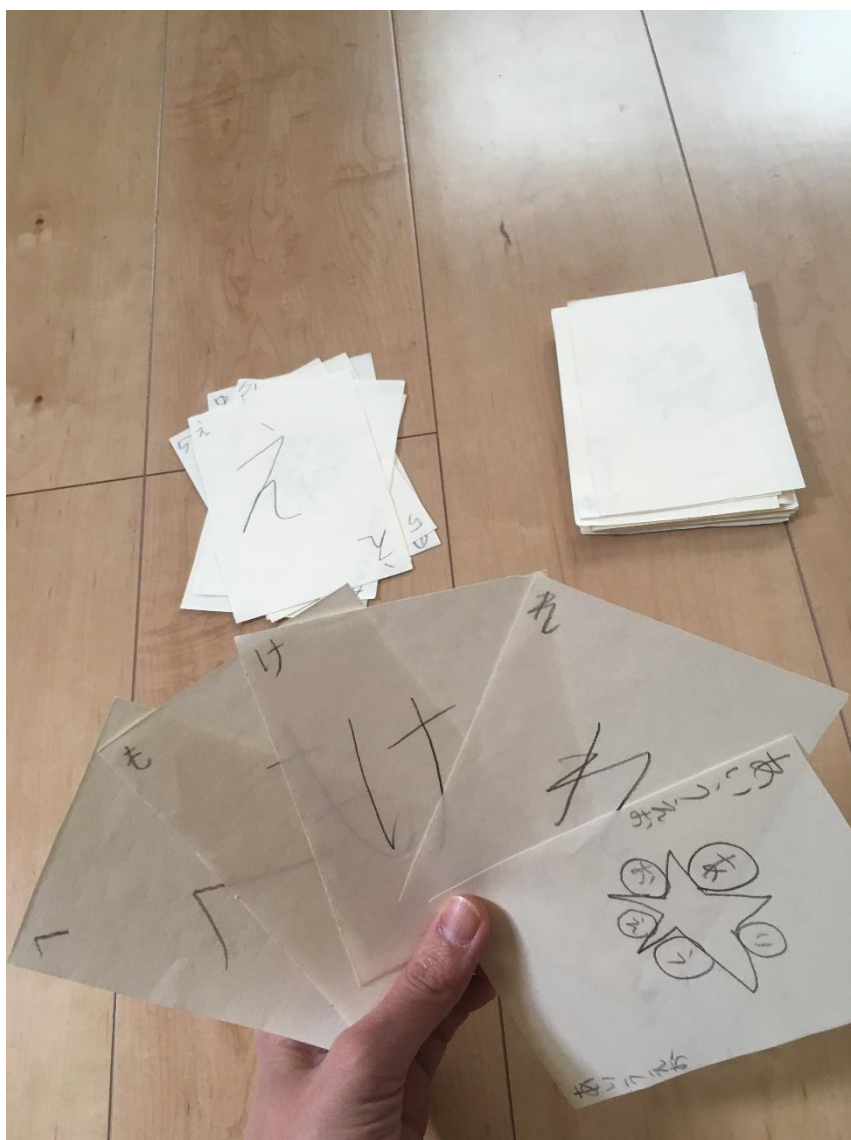


○ワードバスケット

「しりとり」をカードゲームにしたものです。場札の（机の真ん中に表にしている）カードの文字ではじまり、自分の持っているカードの文字で終わる3文字以上の言葉を考え、答えたら終わった文字のカードを場に出します。次のプレイヤーはその文字ではじまり自分の持っているカードで終わる言葉を考えます。一周して誰もカードを出せなかった場合は、山札の（机の真ん中で裏にして山にしている）カードを1枚表にして場札とします。最初に手札をすべてなくしたプレイヤーの勝ちです。ポキャブラリーを試されるゲームです。子供には、使える言葉を2文字以上とする、などのハンデをつけても良いと思います。

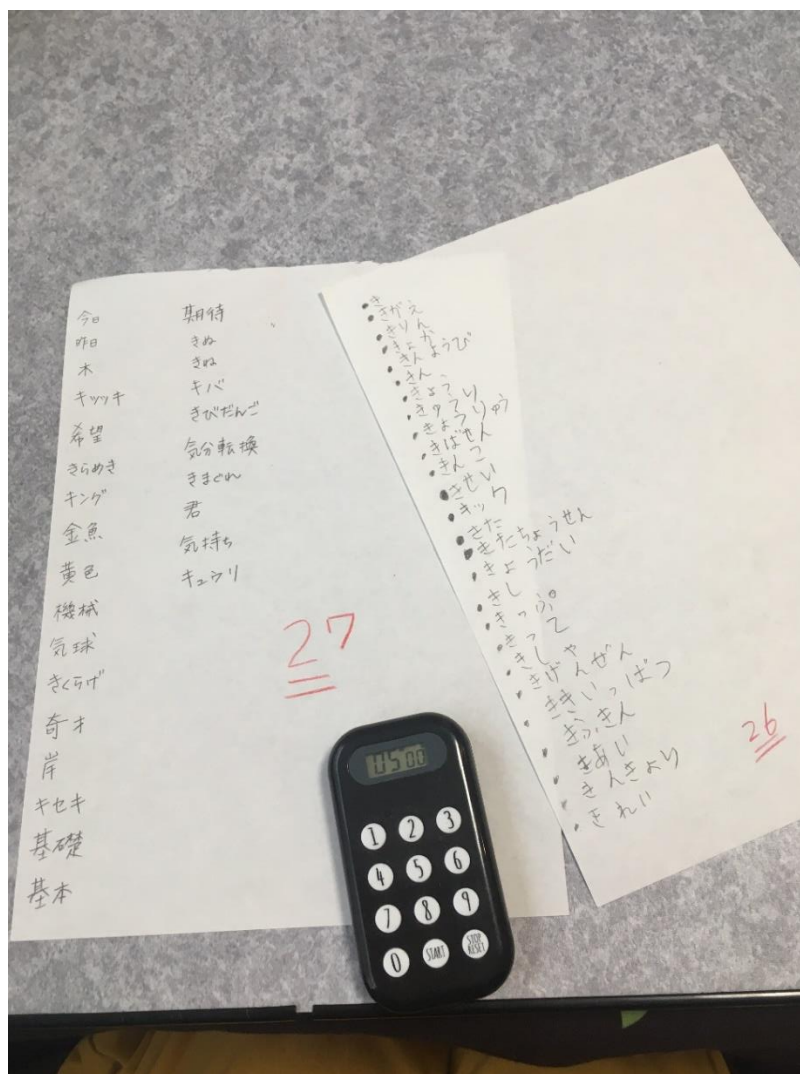
カードには、五十音のひらがなのカードの他にも、「あ行」「か行」などの言葉を許容するカードや、文字数を限定する文字数カードなど、簡単にしたいか難しくしたいのかによって様々なカードを作り足すと、それぞれの家庭に合ったオリジナルのカードゲームが完成します。



○物知り博士ゲーム

紙と鉛筆とタイマーがあればすぐにできます。1人でもできます。

始めにお題となる頭文字のひらがなをひとつ決めます。タイマーを5分に設定し、5分間でいくつの言葉を書き出せるかを競うゲームです。できたらお互いに丸つけをし合うことで、語彙を高め合うことができます。1人で行う場合は、目標を決めて、いくつ書けるかを自分の中で戦います。1日3文字、などと決めてやっていくと習慣になり、楽しく学び続けられるかもしれません。



○計算ババ抜き

トランプを使って遊びます。

まずは本当のババ抜きと同様にカードを配り、同じ数同士のカードを出していきます。場札を1枚開き、残った手札の中で2枚以上のカードを使い、 $+$ $-$ \times \div を駆使して場札の数にできたら、その計算に使用したカードを全て出せます。計算ができない場合はパスをします。一周したら、次の場札カードを開きます。手持ちのカードが全て出せれば、あがりです。手持ちのカードが1枚だけになった場合は、場札のカードとぴったり同じ数の時のみ出すことができます。慣れてくると一回で全てのカードが出せるようになる程、計算式を長くして考えられるようになっていきます。計算に自信がない子には「お母さんが一緒に考えるハンデ」などをつけてあげると良いでしょう。

みんなで協力し合って、なかなかあがれない人の計算を手伝ったり、あと1枚、という人のカードをみんなで場札を開きながら祈ったりする空気はとてもあたたかいですよ。

(例の写真の場合… $9 \cdot 2 \cdot 1 \cdot 11 \cdot 7$ の手札を持っています。場札は6です。 $7-1=6$ なので、7と1のカードを出すことができます。しかし、よく考えると、 $9-2-1$ とすれば3枚いっぺんに出せます。もっともっと考えると… $(11-1) - \{(9-7) \times 2\}$ つまり $10-4=6$ となり、なんと、まとめて全てのカードを出すこともできるのです！



○神経衰弱メイクテン

トランプを使って遊びます。1人でもできます。

まずは本当の神経衰弱のように全てのトランプを裏向きに広げます。開いたカードの数を足して10になったらそのカードをもらうことができます。小さい数をたくさん集めるといっぺんにたくさんのカードがもらえることとなります。10・11・12・13のカードは、それ1枚でもらえます。10の合成を覚えられる楽しいゲームです。慣れてきたら「神経衰弱メイクイレブン(11)」や「メイクトゥエルブ(12)」と数を増やすなどのアレンジもできます。

1人で行う場合は、いっぺんにより多くのカードを取れるように目標を立てると良いでしょう。

